

救われぬ者に救いの手を。
～～NOUMINが行く
～～

オニギリ丸(花束には海苔を巻いて)

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

昔々（と言っても然程も昔じやありませんがね）あるところに、年がら年中畑耕して野菜の世話したり、鈴蒔きから稲刈り、そして藁を編んで草履を作ったりして生活を送っている物珍しき若者（然程若くもありませんが、便宜上言わせてください）が居りました。

その若者は電気製品を使ってないわけではなく、むしろ主婦のように使いこなしていました。ある日、NARUTOというアニメを見て思いました。

「私かもしれない世界に行けるのなら、この世界で救いなき者に手を差し伸べたい。何故、天災と呼んでも遜色がない化け物を命と人生を犠牲にしてまでもその身に封じ込めて

いるというのに、疎まれ、蔑まれ、害されなければいけないのだ。ならば、私が手を差し伸べようではないか」

『よかろう。ならば、お主をNARUTOの世界に送ろうではないか。望みを言え。その望みと、儂が幾つかの選別と共にお主をNARUTOの世界に導こうぞ。しかし、心せよ。お主が行くのはNARUTOであり、NARUTOではない世界ぞ。故に、お主が責任を持つて導くとよい』

「私の望みは、全ての尾獣の力をこの身に宿すこと。もう一つ言わせて貰いたい」
『よいぞ』

「もう一つは、過去未来において存在する全ての術を私に授けてほしい。その全てを身に付ければ、恐らく私はそこから更に新しき術を産み出せる筈だから」

『曇りなき守護の欲望だな。よかろう。お主はその心より曲がることなきようにさせてもらうぞ。では、守護をする中で恋をするも良いし、ゆつくりと心癒すも良い。お主には、救いなき者に救いの手を差し伸べる必要があらば、儂の方から連絡を寄越そう。「何故私にソコまでするのだ？」ほれ、お主は今まで我が孫らを助けてくれたのでな、儂と感謝しておるのだよ。我が名はガイア。この星の神霊ぞ。故に、お主が助けた動物ら全ては我が孫なり。我が孫を幾千、幾万と手厚く助けてくれたのだ。故に星の神霊としての任を一時に忘れて、只の爺としてお主の願いを、祈りを聞き届けようぞ！』

そうして、若者は異世界へと旅だったのです。

※この作品は気分次第で更新するので、すぐに読みたい方はブラウザバックをお薦めします

【転生】

目次

1

【転生】

ふむ、朝か。これから外に出て稲を刈らないといけないな。稲を一田刈った後は朝食を食べよう。朝食を食べたら、畑を耕してから芋を掘ろう。それから、山へ登って山菜を採らなくては。その後は沢へ釣りに行き虹鱒を釣って、内臓を抜いてそのまま塩焼きにして一尾食べれば昼食となる。残りは干物にするなり夕食や次の日の朝食にするなりすれば良い。昼食後は、夕刻まで稲を刈れば良い。

さて、此から稲刈りだ。沢まで行って顔を洗わねば……………

『『『『シャキツとししてください／せんか！』』』』

「何事だ!？」

ふむ。そう言えば、ガイア様?の配慮にてNARUTOの世界に転移させていただいたのであったな。となれば、「救われぬ者に救いの手を差し伸べる」と言えば格好いいことだが、単に自分が気に食わぬから助けたいだけなのだ。故に、私は何時も通りに立ち回れば良い。その姿が「聖人君子」や「無私無偏」などと呼ばれようが、私は只、私に気が食わぬものを全て私の気が済むようにねじ曲げているだけの我が儘な男なのだ。

その内容が、人の傷を癒す行為や人の飢えを満たす行為だとしても、私が見るに堪えない故に身勝手な施しを与えるだけなのだから。

だから私は大層な人物ではない故、妻が欲しいと思つていたのだが、ガイア様？は中々に気の利く方である。

元の世界にいる人々は、私を神の様（いえ、本当に神として奉られておりますよ）に崇め、奉るといふ始末。

故に、私が妻に欲しいと言え、気持ちなんぞ無視して周りが勝手に推し進めてしまふであろうから、私は別の世界に行きたかつたのだ。しかも、その行く先にて私が救いたいと思つてる者らが居るのだから、何よりも代え難いモノであろう。

『何時までも考えていないで、私達のこと構つて欲しいのですが』

「すまない。少しばかり考え過ぎたようだ」

『ハッ。オマエはもう少し頭をカラにするくらいがちようどよい』

「心得た。しかし、考えが過ぎるのは性分なのでな。そう簡単には治せそうにないが、その様に努めるとしよう」

『HEY！ オレ様は一尾の守鶴だZE。ヨロシクウ』

「ああ。宜しく頼む」

『私は又旅と呼んでください』

「そうする」

『僕は磯撫です。精一杯お手伝いさせていただきます』

「助かる」

『俺は水簾洞の美猿王、六道仙人より孫の法号を与えられし仙猿の王、孫悟空齊天大聖だ！』

「長い！ 孫って呼ぶぞ」

『なんだと!?!』

『騒がしいですよ、孫。わたくしは穆王です。この度はわたくしの器として、共に過ごし、共に生きることを感じたいします』

「……………ああ。だが、もう少し口調というか、性格を崩してくれても良いのだが……………」
『それはできません。わたくしは貴方の良きパートナーとして共に存在するとはいえ、わたくしの方が立場は下なのです。故に、わたくしは貴方へ敬意をもって接するのです』

「……………ああ、わかった。」

『今度は俺の番だよ。俺は犀犬っていうんよ。特技は相手をドロドロに溶かすことやよ』

「……………そうか」

『オイラはラッキーセブンの看板背負った唯一の尾獣！その名も重明！！ラッキーセブンのオイラが居れば、アンタもオイラも最強よ！！』

「……………」

『なんか言えよ！』

「……………すまない」

『……………』

『俺は牛鬼だ。好きな物はおでんと熱燗。趣味は墨を使った習字だ』

「こういうのが欲しかったんだよ。よろしく、牛鬼。俺の趣味は畑を弄ったり、田圃で米を作ることだ。好きな物は、新米で作った塩味の握り飯と米焼酎だ」

『ワシは九喇嘛だ。オマエのことはジジイから任されたのでな、仕方ないから面倒見てやる』

『素直じゃありませんね。素直に言えば良いじゃないですか。宜しく願いしますと』

『うるせえぞ堅物！』

『やるのですか？やるのでしよう？ならば、わたくしの全力をもって倒させていただきます』

『オレ様もやるZ E！』

『ラッキーセブンのおおおおおおッ！オイラも参加するぜえええええええええい！！』

『ではっ！私もやります!!』

『楽しそうだから俺も参加するやよ』

『……………僕は遠慮します』

『ウキキ！そんなこと言わねえで磯撫もやるぞ!!』

『俺は熱爛とおでんで一杯やりながら観させてもらうぞ』

『だああああありやあああああああつ!!』

『ナニしやがる!?!』

『ラアアアアアアツキイイイイイイイイイイセブンのおおおおおおおツ』

『てめえ、表出やがれ。ミンチにしてやる』

「賑やかなのは良いが、私の中だということを忘れないでくれよ」

『騒がしくて申し訳ありません。私は天目一箇神という者です。皆この様に騒ぐのは、貴方という存在が居るからなのです。何せ、貴方のことをお頼みするためにハゴロモが私達の前に姿を見せて頭を下げてきたのですから。もう二度と会えないと思っていた彼と一時でも話せたのです。彼らが騒ぐのは、仕方がなきことでしょう。故に、お見逃しください。』

「……………そうだったのか。だが、貴女はどうなのだ？貴女は確か「チャクラの実」を取り戻すためにカグヤを襲ったのであろう」

『はい。ガイア様の命により護っていたものなので、取り戻そうとしたのですが、今はガイア様の命により貴方の補助を任せましたのでご心配入りません』

「そうだったのか」

『はい。今後とも、末永くよろしくおねがいます』

「その言い方では、嫁入りにくるみたいではないか？」

『おおお、お、お嫁さんですか!?! いえ、私はまだ結婚は早い気がするのですが、貴方ならば別に構いませんよ。い、いえ。そういう訳ではないのです。あつ。ですが、貴方と結婚するのが嫌と言うわけでは無いのですよ!?!』

『……………』二ヨ二ヨ二ヨ

「……………友達から始めないか？」

『……………はい』